



# ゆめ通信

## 2023.9.1. No.129

発行 日本養豚事業協同組合  
〒104-0033 東京都中央区新川2-1-10  
八重洲早川第2ビル6階  
TEL.03-6262-8990 FAX.03-6262-8991

## 第23回通常総会開催

理事長 松村 昌雄

令和5年7月28日、第23回日本養豚事業協同組合通常総会は大手町サンケイプラザにおいて総出席者117名となり、議案事項すべて可決されました事をゆめ通信において報告いたします。今期は役員改選に当たり、沖縄県我那覇明理事、熊本県田中哲実理事の2名が勇退されました。我那覇理事は豚事協発足時からの理事として長年組合に尽力されてきました。今期からは我那覇理事は金城栄氏にバトンタッチとなり、田中理事は廃業に伴い退会となり同じく熊本県の角田栄作氏が新任されました。今春より豚事協事務局にて技術部長として勤務されている矢原芳博氏は員外からの理事に就かれ、理事会互選により専務に就任されました事を報告いたします。他の役員は不肖私も含め、留任となり引続き2年の任期を務めることとなりました。

今年是对面での開催で暑い時期でしたが、多くの参加者が得られ、活気に溢れた総会となりました。議長には静岡県松井義輔氏に務めていただき、盛会に終了できました。松井氏には大変お世話になりました。第23期は餌高の中で多くの組合員の方々も苦勞された1年でした。徐々に飼料原料であるトウモロコシ価格は軟化しつつありますが、世界情勢をみますとウクライナ情勢や世界的な高温、また世界最大の米の輸出国であるインドが全面禁輸を発表しており、有利原料であったMA米は値上がりが見込まれ今後も予断を許さない情勢が続くと思われます。豚枝肉価格は暑さの影響等も重なり8月上旬現在東京市場において700円を上回る価格となっており組合員の皆様には順調な経営が続いている事と思います。

第23期の運営状況は組合員数417名、前期比7名減となりました。当期利益5,324万円となり、前期繰越金1,140万円を加えて当期処分利益は6,464万円となり、

利益分量配当金は4,500万円と可決されました。前期に比べ500万円弱の利益は減少しましたが、流動資産は7億5千万円を超え、純資産は2億8,800万円を超え、資産形成は充分蓄えることができてきましたので今後は利用者への還元を中心に運営して参ります。そして全組合員から愛される組合運営を目指してゆきます。更なる指定配合飼料「ゆめシリーズ」のご利用、共同購入事業の拡大等何卒宜しくお願い致します。

今期の重点課題としては①配合内容の変更・見直しによって価格の引き下げができつつある指定配合飼料「ゆめシリーズ」の積極利用の推進②JASVベンチマーキングの普及推進③Topigs Norsvin×メンデルデュロック精液による豚事協推奨のビジネスモデルの推進④業界の若者達を対象とした若夢会の開催⑤獣医師でもある新任矢原専務の得意分野である疾病対策相談⑥女性部の開催など、ここで多岐にわたり紙面の都合上すべては紹介できませんがこちらの内容で進めて参ります。また2年近く実施出来なかった地方セミナーは今年9月北海道支部セミナーからスタートします。日程、内容の詳細は前号ゆめ通信128号をご覧ください。

総会終了後には記念講演として農林水産省農林水産政策研究所所長、高橋孝雄氏による「生産費高騰下における適切な価格形への取り組みについて」と題して講演いただきました。

総会終了後の懇親会にも122名参加していただき、事務局職員である小野寺さんを中心とした4名の方によるベリーダンスショーも開催され、参加者からは大きな拍手が起こり例年以上に活況で和やかな宴となりました。開催にあたり皆様方の多大なる協力には大いに感謝の念しかありません。今期も何卒宜しくお願い致します。

## 「日本養豚激動の25年」 発刊に想う

日本養豚事業協同組合前理事長 稲吉 弘之

立派に刊行された日本養豚協会記念誌を手にとって感無量の思いがした。思い返せば1987年47歳で全豚理事に就任してから、豚事協顧問を退任するまでの33年間、良くも悪くも主に志澤、栗木氏と3人で喧々諤々議論をしながらも業界に対する熱い思いで活動してきた。

志澤氏の長年に亘る業界活動への功労に対する叙勲の祝賀会が2020年2月27日帝国ホテルで盛大に開催された。その時私が閉会の辞で、「志澤氏のようなリーダーは100年に一人出るか出ないかの偉大なリーダーである。我が国の養豚産業発展に尽くした志澤氏の功績は、今日の叙勲に値する立派な功績である」とご挨拶をした。

今回の記念誌を紐解くと正にそうした志澤氏の活躍によって、我が国の養豚産業が発展してきた事が良く理解できる。

活動の中で特に心に残っているのは、メキシコとのFTA交渉の時FTA対策協議会を養豚協会、全豚、豚事協で立ち上げ、短期間のうちに50万人の署名と、活動資金4300万円を集めた。

この資金を使い「日本で豚肉を生産する意義、国益」を皆さまにご理解いただくために、日本農業新聞、全国農業新聞に1面全面的意見広告を出したり、国会議員、秘書30人の方々をお迎えして、全国から500名が参加して総決起大会を開催したり、志澤さん発案の侍姿で、カンクーンの交渉場へ乗り込み一週間侍姿で交渉団の応援をした。現地ではこうした姿が珍しがられ連日、新聞、テレビで取り上げられた。このアイデアは志澤さんでなければ中々出てこない名案であった。

こうした活動の成果があって2004年3月12日関係各国閣僚会議で、豚肉については差額関税制度とそれに基づく基準輸入価格は現状を維持し、分岐点価格（部分肉1kg当たり524円）を超える豚肉については従価税率を現行4.3%から2.2%に引き下げる数量枠を設けるといった軽微な影響にとどめることが出来た。その後の国際交渉の場ではこれが前例となり、我が国にとっては有利な交渉ができた。

短期間にこうした大きな成果を上げることが出来たのは、各団体の長が3人代表に就任する3代表制を取り、それぞれが役割分担の下に効率的な活動ができたことが大きかった。

又この三団体合同の活動が養豚組織の後の全国一本化に繋がっていった。

TPP交渉の時期に志澤さんは病氣療養中で、養豚

協会会長の退任を強く希望された。しかし当時志澤さんを欠くことは業界にとって大きなマイナスになると判断し、無理を承知で留任を要請した。

奥さんをお願いにいった処、奥さんから「稲吉さん志澤の残された人生を私たち家族に返してください」と言われた言葉は、今でも私の心に強く残っている。私たち業界の強い要請を受け入れ家族の了解のないままに、志澤氏が留任の意思を固めてくださった。その代わり栗木氏が会長代行、私が代表副会長として3人体制で業務を遂行した。

志澤氏の病氣は難病中の難病で、この病氣に罹った人で生存できた人は、我が国では過去150万人に1人との事。最近この病氣の関係者の集まりで、自らの闘病生活の体験発表をされ多くの関係者の共感を受けられた。そんな話を志澤氏から聞きながら、「志澤さんは養豚協会の会長を続けられたから、それが生き甲斐となって病氣を克服できたのではないですかと申し上げたら、そうです稲吉さんは命の恩人です」とおっしゃっていただいた。こうした話ができる状態になったからよかったものの、業界の都合だけで志澤氏ご家族には随分ご負担をおかけして、申し訳なかったと思う今日この頃である。

TPP交渉の中で国内対策を牛並みに勝ちえたことは、正に志澤さんの粘りの賜物であった。

当時足繫く東京通いをして、夕方農水省を出て今日は18時半の新幹線に乗れるなど思っていると、「稲吉さんちょっと議員会館に寄って行きましょう」と言われ、何時も帰宅は最終新幹線で帰宅は24時近くであった。

当時複数の先生に現在の豚マルキンをお願いにしていたが、ある時ある先生が「養豚家が牛並みの経営対策を打ってくれというのは失礼ですよ」と言われた。この言葉に代表されるように牛並みの経営対策の実現は無理だと判断し、「志澤さん作戦変更をしましょうよ」といった処、「いや稲吉さんもう少し頑張りましょう」との回答。その後も粘りに粘り最後は志澤さんの粘り勝ちとなった。

志澤さんなくして現在の手厚い養豚経営安定対策事業「豚マルキン」はあり得なかった。

業界活動は正しく後世に語り継ぎ、後輩たちがそこから学び、先人の努力に感謝し、更に上を目指し努力する事が肝要と思う。

そうした意味で大変素晴らしい記念誌が出来上がったと思う。刊行に汗をかいた人々に心から敬意を表する。



# 新役員決定のお知らせ

7月28日（金）の第23回総会にて新役員選出され、理事2人が退任し新任に2名選出、専務理事として事務局より選出されました。

## ◎退任される理事

- ① 我那覇明 理事（沖縄・有限会社我那覇畜産）
- ② 田中哲実 理事（熊本・有限会社たなか）

## ○新任された理事

- ① 金城栄 理事（沖縄・株式会社農業生産法人おおいしばるファーム）
- ② 角田栄作 理事（熊本・有限会社角田農場）
- ③ 矢原芳博 専務理事（員外・事務局）



退任の我那覇理事（左）と新任の金城理事（右）

## 第24期役員名簿

- |      |    |     |                        |
|------|----|-----|------------------------|
| 代表理事 | 松村 | 昌雄  | （埼玉・有松村牧場）             |
| 副理事長 | 栗木 | 鋭三  | （愛知・株ロッセ農場）            |
| 副理事長 | 山本 | 孝徳  | （愛知・有アクティブピッグ）         |
| 専務理事 | 矢原 | 芳博  | （員外・事務局）               |
| 理事   | 浅野 | 政輝  | （北海道・有浅野農場）            |
| 理事   | 稲吉 | 克仁  | （愛知・有マルミファーム）          |
| 理事   | 金城 | 栄   | （沖縄・株農業生産法人おおいしばるファーム） |
| 理事   | 後藤 | 祐三  | （員外）                   |
| 理事   | 志澤 | 輝彦  | （神奈川・有ブライトピック）         |
| 理事   | 菅谷 | 守   | （千葉・有菅谷ファーム）           |
| 理事   | 竹延 | 哲治  | （鳥取・ファロスファーム株）         |
| 理事   | 角田 | 栄作  | （熊本・有角田農場）             |
| 理事   | 水野 | 慎太郎 | （宮城・有みずの）              |
| 監事   | 越智 | 富義  | （愛媛・有カワタキ）             |
| 監事   | 丹尾 | 久剛  | （秋田・有丹尾農場）             |



新任の矢原専務理事（左）と退任の田中理事（右）



第24期役員一同

## 第23回総会レポート



松村理事長あいさつ



ご来場の来賓の皆様



総会会場の様子 サンケイプラザホール



総会後行われた海外研修報告  
(講演者：ブライトピック千葉伊藤広大氏)

### 記念講演について

農林水産省 農林水産政策研究所の高橋孝雄所長から「生産費高騰下における適切な価格形成への取組について」という演題でご講演を頂きました。①原材料価格等の直近の高騰状況についてご解説頂いた上で、②政府全体の対応として、「転嫁円滑化施策パッケージ」、「優越的地位の濫用に関する緊急調査」、「パートナーシップ構築宣言」等についての説明、③農水省における価格転嫁政策として、「食品製造業・小売業者間における適正取引推進ガイドライン」、「食品等流通調査」、「食品コスト上昇に関する動画の配信」、さらには「食料・農業・農村基本法の検証・見直し」に至る流れと現時点までの経過、フランスのEgalim（エガリム）法、Egalim2法の解説と日本の状況との比較、④畜産分野における価格転嫁の議論として「畜産・酪農の適正な価格形成に向けた環境整備推進会議」での議論の概況と、⑤今後の展開についての展望、をお示しいただきました。高橋所長は、この7月までは農水大臣官房

総括審議官（新事業・食品産業）を努められており、まさに適切な価格形成に関する施策の陣頭指揮を執っておられましたので、価格転嫁に関するこれまでの政府、農水省の動きと今後の見通しをわかりやすく整理していただきました。フロアからの質疑応答も活発に行われ、今後の養豚業界における適切な価格形成の仕組みづくりに繋がる議論となりました。



総会後行われた記念講演の様子  
(講演者：農林水産省 農水産政策研究所 高橋 孝雄 所長)



# JASVベンチマーキング 2022年データの解析結果

明治大学 農学部 農学科 専任准教授  
佐々木 羊介

## はじめに

近年、世界的な人口増加による食料需要の拡大に伴い、良質なタンパク源として、畜産物の需要が拡大傾向にあります。この需要拡大により、国内外の養豚生産農場では、多頭飼育による大規模農場化、遺伝育種改良による高能力種の創出、ICT機器の導入が急激に進んできました。一方、課題として、近年ウクライナ情勢や急速な円安に伴い、飼料の主原料となる穀物の飼料価格や化学肥料の価格が急激に高騰しています。加えて、日本国内におけるCSF（豚熱）の発生や海外におけるASF（アフリカ豚熱）の発生に伴い、飼養衛生管理基準の遵守や野生動物への対策などが求められており、防疫体制の見直しや強化が重要となっています。このような情勢下において、養豚産業を継続する上では生産効率の改善やコストの削減が重要であり、そのためには自農場の弱点や課題を客観的に評価・抽出する必要があります。そのための方法として、ベンチマーキングが挙げられます。

ベンチマーキングとは、一般的に経営改善のために活用される手法であり、自社の現状が比較対象と比べてどうなのかを知るための活動です。養豚では「自農場に関する生産成績を継続的に測定し、優れた成績を持つ農場の生産成績と比較して、何が自農場の改善すべきポイントかを明らかにし、そのためにどのような解決策を取るべきか検討すること」となります。養豚農場を経営する上で、自農場の現状を正しく把握するためには「データ」が必要不可欠となります。養豚では繁殖や肥育に関連する生産データはもちろんのこと、生産コストや在庫管理などのデータによって、農場のお金の動きを理解することができます。特に生産データは経営にも大きく影響するため、データ管理はとても重要です。人間の記憶力は曖昧であ

り、今日覚えたことを来週も確実に覚えている保証はありません。ましてや、1年2年経った時に、記録をしていなければ成績を振り返ることができません。日々の生産活動に関わる記録を保持することは、安定した養豚経営を営み、事業計画書を作成する上で欠かすことができない必須条件となります。また、これらのデータは経営改善だけに留まらず、家畜伝染病の発生や不測の災害が発生した際に、農場の資産を証明するエビデンスにもなり得ます。

本稿では、ベンチマーキングデータを用いた解析結果として、(一社)日本養豚開業獣医師協会(JASV)が生産者とともに実施しているJASVベンチマーキングの2022年データを用いた解析の結果について紹介します。本稿はピッグジャーナル2023年7月号に掲載された記事ですが日本養豚事業協同組合の皆様にも有益な情報と思いますので、本誌にも掲載いたしました。

## 解析に用いたデータの概要

本調査では、JASVベンチマーキングのWEBシステムにおいて提出されたデータを用いました。JASVベンチマーキングでは、表1に記載した項目に関して、月毎の数値を提出・入力します。経営形態やPRRS有無は月毎の変動があまりないため、毎月入力が必要な項目は約20項目となります。提出された項目を用いて、繁殖・肥育・経営に関する各種成績を計算します。

本調査では、JASVベンチマーキングに参加している170農場のうち、2022年の一年間における1-12月の全ての月のデータがある143農場の年間成績を分析に使用しました。なお、提出されたデータについて精査を行い、明らかなミスや異常値があった場合は適宜修正または除外しました。また、今回の分析で

表1 JASVベンチマーキングの入力項目

区分	項目
農場情報	飼養母頭数、飼養品種、経営形態、養豚場従事者数、PRRSの有無
繁殖情報	種付頭数、分娩腹数、総産子数、生存産子数、離乳子豚頭数、分娩クレート数、自家産の候補繰入頭数
肥育情報	出荷頭数、出荷枝肉重量、総枝肉販売金額、離乳後の肉豚在庫頭数、哺乳豚在庫頭数、離乳後事故頭数、肥育面積、子豚販売情報
費用情報	総飼料購入量、総飼料購入金額(全体)、ワクチン・抗菌剤費、出荷肉豚の運賃、と畜経費

はパークシャー種飼育農場は除外しました。本稿では、ベンチマーキングデータを用いた解析結果のうち、主要な結果のみ抜粋して紹介いたします。

### 全体の記述統計

記述統計とは、収集したデータの示す傾向や性質を把握する手法のことです。今回は2022年ベンチマーキングデータの記述統計として、上位10%および25%の値、中央値、下位25%および10%の値を表2に示しました。上位10%とは、全体の中で、上から10%の数値であり、例えば150農場のデータであった場合、上から15番目の農場のデータとなります。ベンチマーキングに参加している農場は、各項目における自農場の立ち位置についてフィードバックを受けています。

主要な項目における経時的変化について、過去10年

表2 2022年ベンチマーキングデータの記述統計

項目	上位10%	上位25%	中央値	下位25%	下位10%
粗利益(/母豚/年)	¥657,495	¥506,898	¥399,502	¥286,178	¥201,245
販売額(/母豚/年)	¥1,216,222	¥1,078,505	¥967,842	¥806,412	¥691,173
粗利益(/肉豚)	¥22,415	¥19,839	¥16,484	¥13,112	¥10,229
販売額(/肉豚)	¥42,526	¥41,106	¥39,858	¥37,592	¥34,794
飼料費(/肉豚)	¥17,923	¥20,725	¥22,542	¥24,973	¥27,135
粗利率(/従業員/年)	¥33,115,758	¥24,425,750	¥18,142,451	¥13,577,988	¥9,816,854
粗利益(/㎡/年)	¥54,954	¥45,437	¥35,375	¥23,351	¥15,198
売上資料比率	45.7%	50.7%	58.1%	66.1%	70.3%
ワクチン・抗菌剤費(/肉豚)	¥841.2	¥1,163.9	¥1,657.2	¥2,221.6	¥3,092.9
出荷枝肉重量(/母豚/年)	2,325.4kg	2,067.3kg	1,848.1kg	1,606.8kg	1,413.4kg
出荷枝肉重量(/㎡/年)	220.8kg	193.9kg	168.8kg	137.0kg	100.4kg
枝肉価格(/kg)	¥554.1	¥539.8	¥520.3	¥499.3	¥454.4
出荷頭数(/母豚/年)	29.3頭	26.9頭	24.3頭	21.3頭	18.5頭
枝肉重量(/頭)	79.0kg	77.6kg	76.3kg	74.2kg	72.8kg
離乳後事故率	3.2%	4.5%	6.9%	10.3%	14.3%
飼料価格(/kg)	¥54.9	¥59.2	¥64.2	¥68.9	¥72.7
飼料費(/枝肉)	¥239.5	¥271.5	¥301.2	¥333.4	¥361.6
増体重(g/日)	737.3g	684.2g	635.4g	577.4g	536.1g
出荷日令	161.3日	173.4日	183.4日	201.0日	220.7日
農場枝肉FCR	4.20	4.39	4.67	5.00	5.26
肉豚枝肉FCR	3.58	3.74	3.93	4.23	4.48
肥育密度	0.78㎡/頭	0.87㎡/頭	1.03㎡/頭	1.21㎡/頭	1.53㎡/頭
離乳子豚数(/母豚/年)	31.1頭	29.3頭	26.9頭	24.1頭	21.6頭
離乳子豚数(/クレート/年)	148.5頭	120.5頭	101.5頭	83.9頭	72.7頭
離乳子豚数(/腹)	12.8頭	12.2頭	11.3頭	10.6頭	9.7頭
分娩回転率(/年)	2.50	2.44	2.36	2.27	2.16
生存産子数(/腹)	14.8頭	14.0頭	13.0頭	12.0頭	11.3頭
分娩率	93.3%	90.8%	86.6%	83.2%	79.7%
総産子数(/腹)	16.5頭	15.8頭	14.7頭	13.5頭	12.7頭
死産数(/腹)	1.0頭	1.4頭	1.6頭	2.0頭	2.5頭
常時母豚数	1,966頭	1,078頭	532頭	251頭	103頭
飼料費(/母豚/年)	¥434,686	¥488,676	¥548,824	¥596,479	¥646,456
ワクチン・抗菌剤費(/母豚/年)	¥20,095.9	¥28,134.0	¥39,452.2	¥53,421.5	¥71,351.0
哺乳中死亡率	5.9%	8.6%	12.2%	15.7%	18.0%

間における年間母豚当たり粗利益・飼料費・販売額の推移を図1に示しました。年間母豚当たり粗利益は2014年以降毎年40万円/母豚/年を上回っていましたが、2022年は39.9万円/母豚/年と40万円を下回りました。この理由は、ウクライナ情勢や急速な円安に伴う穀物の飼料価格高騰の影響であり、年間母

豚当たり飼料費は2020年の約37万円より、2021年では約43万円、2022年では約55万円と、2020年比でそれぞれ16%、49%も上昇しています。年間母豚当たり飼料費を構成する要因として、飼料価格および農場枝肉FCRの過去10年間の推移を図2に示しました。2018年から2020年までの飼料価格は44円/kgでした

図1 粗利益と飼料費・販売額の推移（値は各年の中央値）

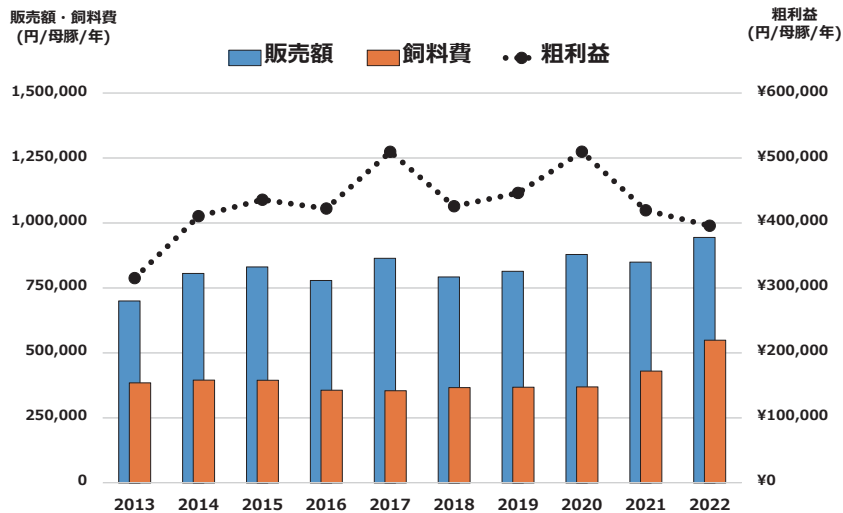
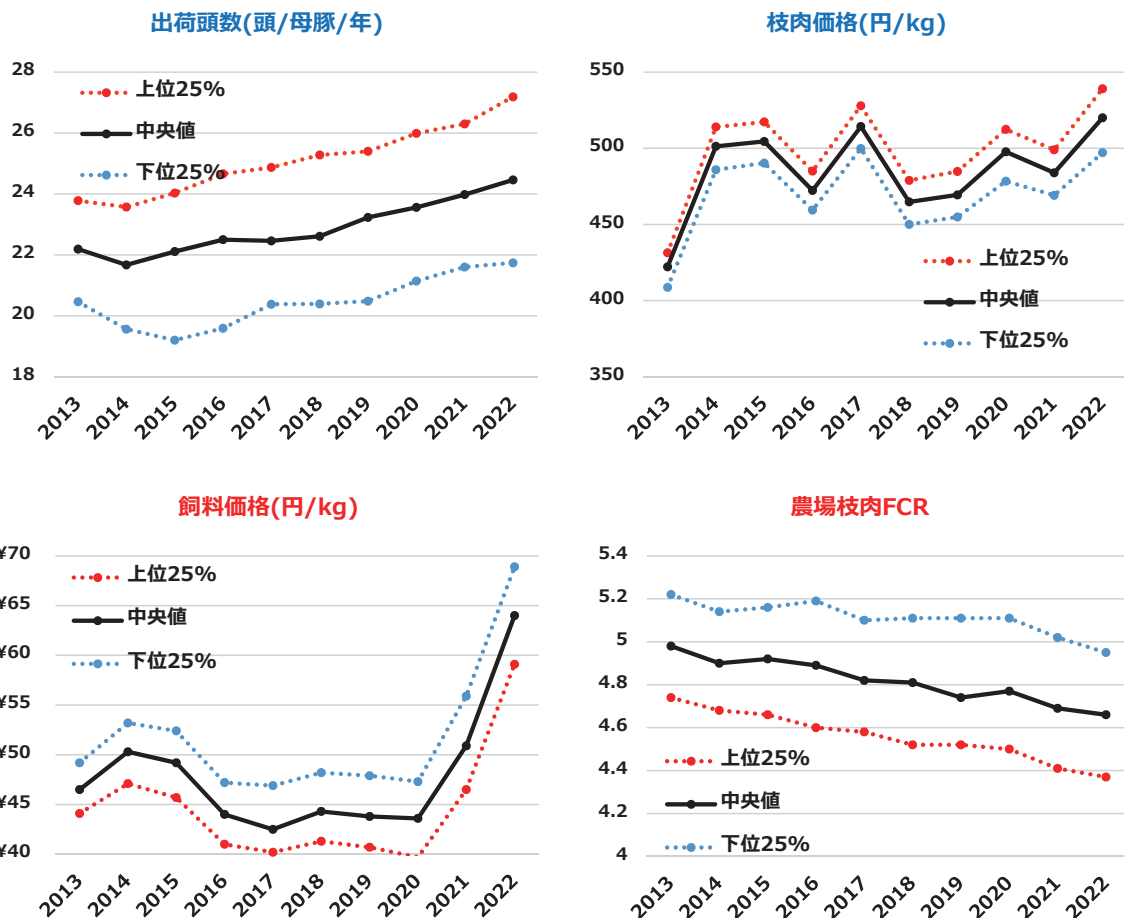


図2 粗利益と飼料費・販売額の推移（値は各年の中央値）



が、2021年では51円/kg、2022年では64円/kgと着実に増加しています。その一方で、農場枝肉FCRは毎年改善傾向にあり、飼料の利用効率は年々改良されていることが伺えます。また、この飼料高騰下においても、年間母豚当たり販売額は昨年と比較して約10万円/母豚/年増加しており、販売額は堅調に増加していることが伺えます。この要因は、枝肉価格だけでなく、年間母豚当たり出荷頭数の増加が寄与しています。年間母豚当たり出荷頭数は年々増加しており、これは多産系母豚の導入による効果が大きいと考えられます。また全体の上位10%の農場では年間母豚当たり出荷頭数が29頭を超えており、今後年間母豚当たり出荷頭数が30頭を超える農場が増えてくることが予想されます。これらの傾向より、今後飼料価格の高騰が落ち着いた場合、年間母豚当たり粗利益は再度上昇することが見込まれます。

### 属性別の成績比較

各種成績の属性別比較として、地域別、飼養規模別、

PRRSの罹患状況別の比較をそれぞれ図3、図4、図5に示しました。地域別の成績比較において、年間母豚当たり粗利益および販売額は北陸東海の農場群が北海道および九州の農場群よりも有意に高い結果となりました。北陸東海の農場群では年間母豚当たり離乳子豚数および出荷頭数が他地域よりも良好であり、この結果が反映された形となります。一方、年間母豚当たり飼料費には地域間における有意な差はみられませんでした。また北関東、南関東および九州の農場群では、他地域よりも離乳後事故率およびワクチン・抗菌剤費が高い傾向がみられました。これは該当地域における疾病罹患状況を反映している可能性が考えられます。

飼養規模別の比較において、年間母豚当たり粗利益および販売額は飼養規模間で差がみられなかったものの、年間母豚当たり飼料費は、飼養規模が大きくなるにつれて低くなる傾向がみられました。また、年間母豚当たり出荷頭数などの生産性は飼養規模間で有意な差がみられなかったものの、離乳後事故率

図3. 地域別の成績比較

東北：青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島

北関東：茨城、栃木、群馬

南関東：埼玉、東京、千葉、神奈川

北陸東海：新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、静岡、愛知、岐阜

近畿中四国：上記以外の本州の都府県

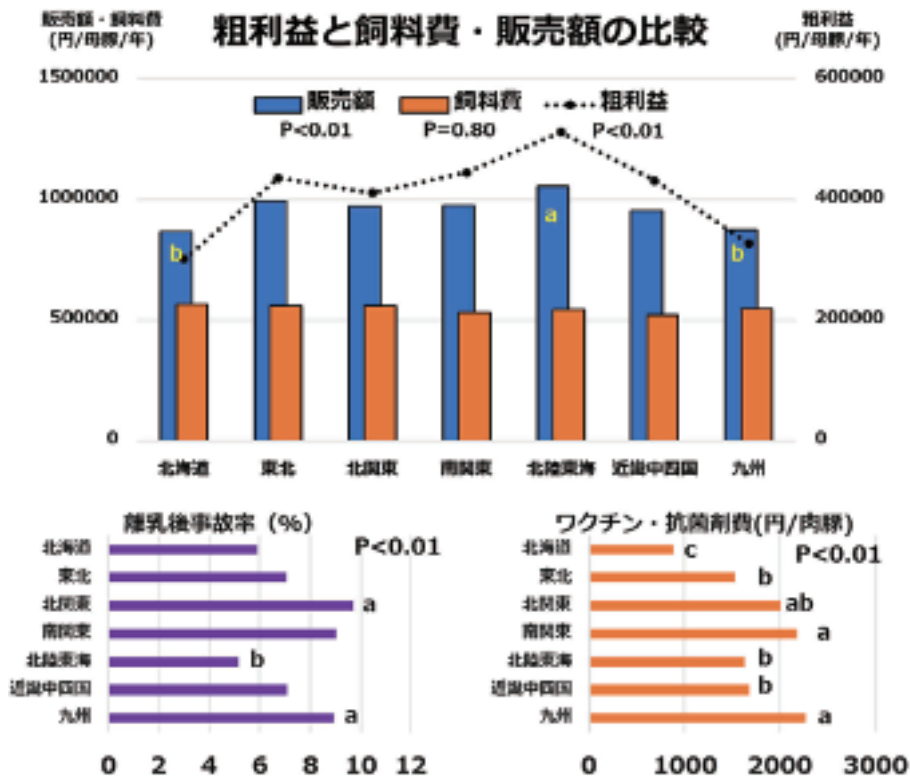




図4 飼養規模別の成績比較

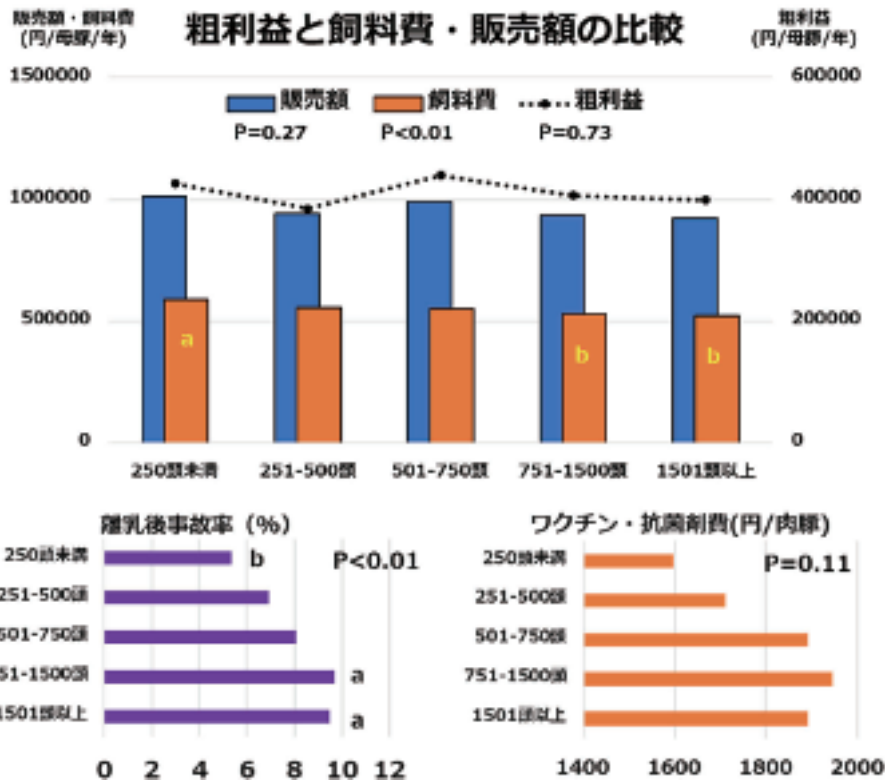
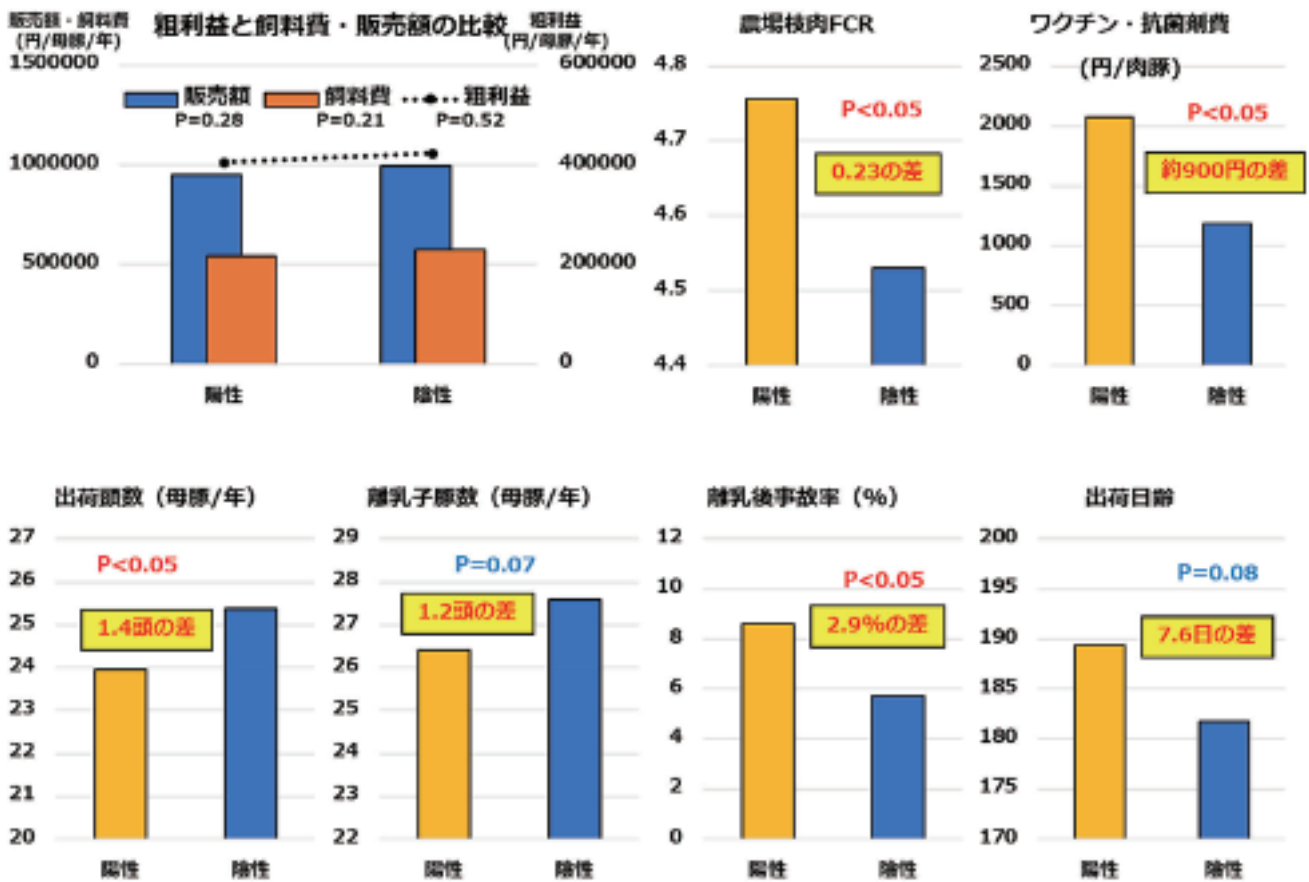


図5. PRRS陽性 (N=94農場) とPRRS陰性 (N=43農場) 別の成績比較



やワクチン・抗菌剤費は飼養規模が大きい農場で高い傾向がみられました。

PRRSの罹患状況別の比較では、PRRS陰性の効果が如実に数値に反映されました。統計学的差はなかったものの、PRRS陰性農場では陽性農場よりも年間母豚当たり粗利益・販売額が良好でした。また、離乳後事故率はPRRS陰性農場で約2.9%低く、年間母豚当たり出荷頭数も1.4頭多い結果となりました。加えて、農場枝肉FCRや出荷日齢もPRRS陰性農場で良好であり、特にワクチン・抗菌剤費は肉豚当たり約900円も低くなるという結果となりました。これは農場の衛生状況を良好にすることが、農場の生産性向上に大きく貢献することを示唆しています。

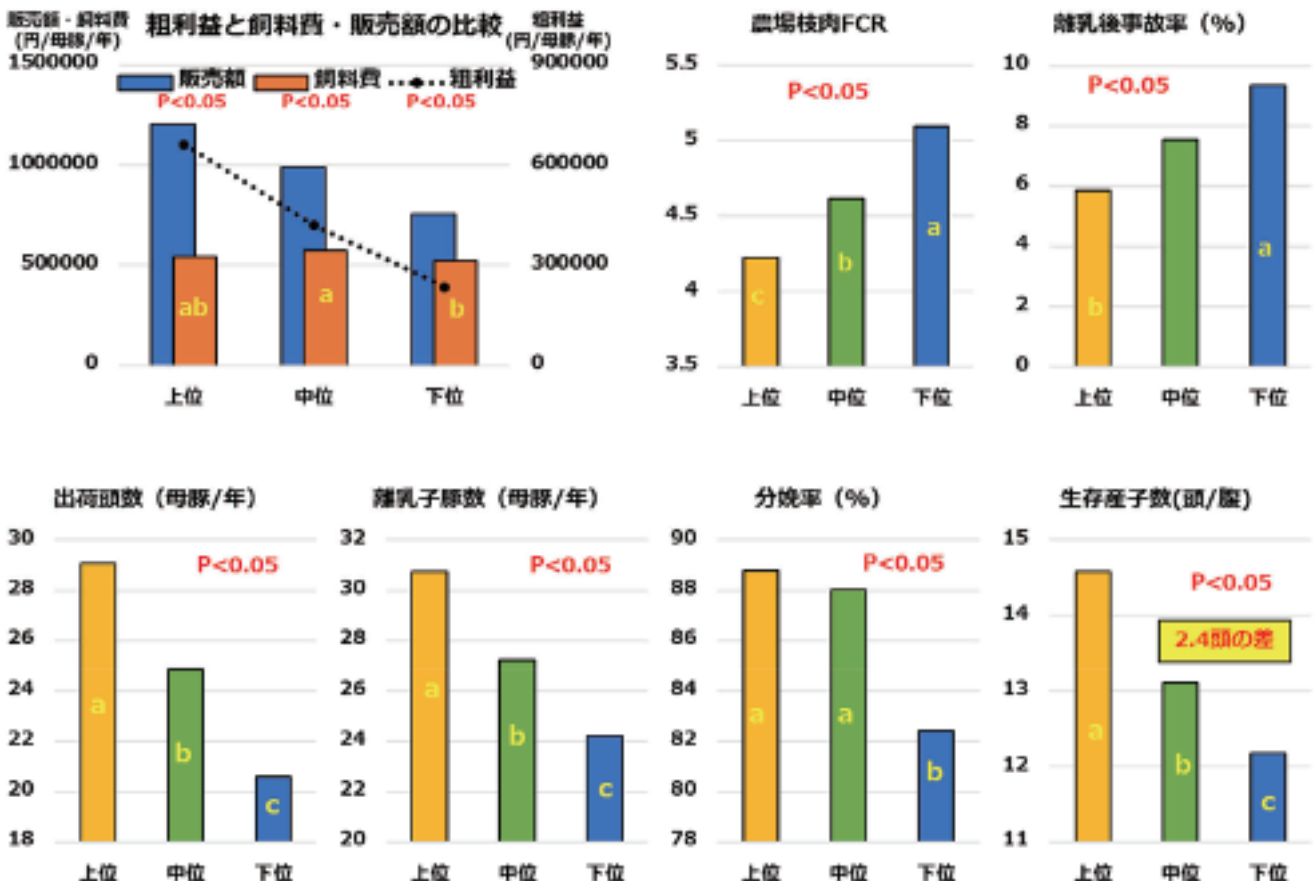
### 成績上位／下位農場の成績比較

次に、成績上位・中位・下位農場の間における成績比較を図6に示しました。農場の分類として、年間母豚当たり粗利益の項目を用いて、AIを用いた機械学習によって成績を上位・中位・下位に分類しました。年間母豚当たり粗利益を用いて分類している

ため、上位農場はもちろん年間母豚当たり粗利益が高く、そして年間母豚当たり販売額が有意に高かったものの、年間母豚当たり飼料費は上位農場と中位農場・下位農場の間で差がみられませんでした。これは、粗利益の差が飼料費よりも販売額に寄与していることを示唆しています。この裏付けとして、年間母豚当たり出荷頭数・離乳子豚数は上位農場が有意に高く、下位農場と比べると、6-8頭差がありました。合わせて、離乳後事故率も上位農場で低く、飼料要求率も良好な数値を示しています。

ここで注目すべき点は、一腹当たり生存産子数です。上位農場では14.6頭、中位農場では13.1頭、下位農場で12.2頭であり、生存時点において上位と下位の間で2.4頭の差があることが伺えます。単純に産子数の増加が粗利益の増加に必ず繋がるわけではありませんが、養豚経営では豚を出荷することで初めて収入が得られるため、母豚の産子数は重要視すべきポイントだと考えられます。近年多産系母豚を導入する農場が増えてきていますが、自農場の成績に悩んでいる場合、今一度母豚の品種について検討しても

図6 成績上位／下位農場の成績比較



良いかもしれません。また、分娩率についても着目する必要があります。成績上位農場と中位農場の間では差はみられないものの、中位農場と下位農場の間では分娩率に約6%差がみられます。豚は牛などと比べて受胎率が比較的高く、離乳後1週以内で多数の母豚が発情回帰するため、受胎成績に関してあまり重要視されていないケースがみられますが、安定した子豚生産を達成するためには、分娩率についても再考することが有用であるかもしれません。

### 最後に

ベンチマーキングでは、自農場の課題点や全体の傾向把握など、様々なメリットがあります。しかし、注意すべき点として、品種や飼養管理、使用している飼料やその給餌プログラム、疾病の蔓延状況や農場の飼養密度といった「数値の裏に隠された情報」の影響を多分に受けることがあるため、得られた結果を解釈する際に、隠れた要因を考慮した上で判断する必要があります。そのため、自農場の成績改善のためには、自農場の詳細データを用いて分析することが必須となります。

その上で、ベンチマーキングによって問題の発生に起因する因子が明らかになった場合、その因子の制御の可否について考える必要があります。その因

子について、ステークホルダー全員で協議を行い、制御可能であるならばその因子の改善を試みる必要があります。但し、その際には制御に要する費用や労力も考慮する必要があります。また、制御が不可能であるならば、その事象の発生に向けた対策を予め準備する必要があります。このように、データ管理によって、問題の早期発見・早期解決をすることにより、成績を改善できることが期待されます。

最後に、ベンチマーキングは全体の傾向を把握することが主目的であるため、参加農場数が少ない場合、得られる知見や情報が限られてしまいます。そのため、ベンチマーキングを行う上では、参加農場数の向上が最重要課題となります。自農場の生産性や経営情報を公開することには抵抗を感じる方もいらっしゃると思いますが、少しでも多くの農場が参加できるような枠組み・体制を関係者全体で協議していることが重要だと思います。JASVベンチマーキングに興味のある方はJASV事務局にお問い合わせください。

(一社) 日本養豚開業獣医師協会 (JASV) 事務局  
TEL 029-875-9090

メール [pig.jasv@r7.dion.ne.jp](mailto:pig.jasv@r7.dion.ne.jp)

## JASVベンチマーキング2022

参加農場170農場の2022年1月～12月間のベンチマーキング解析結果を元に、下記部門の上位三農場および各部門で成績が大きく改善された農場を部門ごとに「Jump Up賞」としてJASVが表彰し、豚事協から副賞として賞金を授与しました。全受賞者16農

場のうち14農場が豚事協の組合員で、有限会社マルミファームが「母豚1頭当たり粗利益部門最優秀賞」を授与されました。

各部門の最優秀賞受賞者は下記の通りです。おめでとうございます。

- ・母豚1頭当たり粗利益部門：有限会社マルミファーム（愛知県・組合員）
- ・母豚1頭当たり出荷枝肉重量部門：有限会社飯田養豚場（青森県・組合員）
- ・母豚1頭当たり離乳頭数部門：有限会社岩徹養豚（青森県・組合員）
- ・農場枝肉FCR部門：有限会社岩徹養豚（青森県・組合員）
- ・離乳後事故率部門：有限会社片岡畜産（千葉県・組合員）



## 第24期海外視察研修に参加して

(有) 石上ファーム 石上 由紀

今回、第24期海外研修に参加させていただきました石上由紀と申します。

初めに簡単な自己紹介をさせていただきます。私は現在、主に総務を担当しています。

前職はアパレル店員をしており、23歳の時に弊社の常務取締役である兄に誘われ、家業に入りました。当時、社長だった祖父に「じいちゃん、事務員で雇ってほしい」と伝え、入社が決まり、配属された先はバリバリの現場でした。免許を取得し、初めてトラックに乗ったときは、ミラーを折ってしまい、それは今でも鮮明に覚えています。今では、大型トラックにも乗れるようになりました。

弊社の生産状況は、入社した当時は母豚3200頭規模の一貫経営しており、年間1母豚当たりの出荷頭数は18頭前後と、とても厳しい生産状況でした。

当時、私は現場に従事しており、事の重大さには気づかず、この数字が普通なんだと、数字になんの違和感もなく毎日業務に取り組んでおりましたが、様々なセミナーで勉強していくうちに、ようやく自分の置かれた環境が如何に厳しい生産状況だか気がきました。

その状況に気づいていた兄は2つの大きな方向性を決め、動いていました。1つ目は高繁殖豚ダンプレットの導入、2つ目はGP牧場の豚舎の更新でした。数字に表れるまでには数年かかりましたが、母豚は2650頭に減頭し、今では1母豚当たりの出荷頭数は22頭前後まで数字が伸びました。その頃から兄は、様々な勉強会や海外視察に行き、いろんな情報を持って帰っては、「外に出ると、有益な情報で溢れ、質問すればみんなが答えてくれる素晴らしい業界だ」とよく口にしていました。国内のセミナーや勉強会には、私も足を運び、勉強していましたが、国外に出たことがなく、いつか外国の養豚の状況を自分の目で見てみたいとは思いながら入社10年を迎えました。そんなときに、今回の豚事協の海外視察研究の案内を目にし、兄から背中を押され、参加を決めました。

私が不在の1週間、現場のみんなには負担をかけてしまうけれど、絶対に活かせる情報を取ってくるぞ!と意気込み迎えた出発の日、私は家を出る5分前に成田空港に向かおうとしましたが、ふと日程表を確認したら、羽田空港だとわかり、研修にいけな



ポークエキスポ会場にて

いと思いましたが、なんとか間に合い、無事に出発することができました。

最初の2日間は、ポークエキスポ展示会と大竹先生が設定して下さったJBS、スミスフィールドとのミーティングがありました。JBSはアメリカNo.2のパッカーであり、1日と畜頭数9万2000頭と日本では考えられないスケールの大きい規模間での内容でした。そこでいくつか、弊社の課題を質問しましたが、課題が改善できる回答だったため、このような機会を作ってく下さった大竹先生には、感謝しています。次にスミスフィールドはアメリカNo.1のパッカーであり、JBS、スミスフィールドともに抱えている悩みは日本と類似している点がいくつかありました。どちらも経営は非常に厳しいとのことで、今後課題となるカルフォルニア12条、人手不足、USA豚価、輸出の課題など、様々なお話を聞くことができました。

その後の2日間は、カーテージ獣医サービス運営の繁殖農場と肥育農場を視察させて頂きました。1日目は繁殖サイト、2日目に肥育農場を見させて頂きました。繁殖農場は、母豚数6400頭、フリーストールを導入されており、初めて目にするフリーストールには圧倒されました。年間離乳頭数も34頭達成しており、成績、疾病状況共に素晴らしい農場でした。

肥育農場は、飼養頭数5200頭でした。直近の事故率も2.4%と素晴らしい成績でした。

農場の他にも、カーテージ獣医大学・ラボも見学しました。



肥育農場見学時にて

普段、自農場で目にしている固定概念が、覆ることが多々ありました。普段疑問に思うことなく、当たり前前と置いていたことが当たり前ではなく、1つ1つ、目的と意味を理解しなければならないことにも気付きました。

この研修で得られたことは、様々なことを目で見て、触れることが出来、共に研修に行った仲間や先生に出会えたことです。1週間共に過ごす中で、いろいろなことを教えて頂き、アメリカから帰ってきた今でも、仲間と連絡を取る中になれたことです。

旅の道中、松村理事長から「今後、会社を良くしていきたいなら、1回でも多く都内に足を運び、勉強することが大事なこと」と教えて頂きました。その言葉は、私の中で非常に大きく、今後も自分、社員含め、勉強していこうと改めて感じさせられた研修でした。

総括としまして、今回得た経験や仲間との出会い、過去の失敗談や成功談を分析し実行する事が大切だと感じました。自社でもしっかり結果を出し、地域の養豚産業、引いては国内畜産産業を盛り上げ、支えられるような存在に成長できればと強く感じました。

改めまして、豚事協の皆様、大竹先生、現地で様々なことを教えて下さった皆様、共に勉強した生産者の皆様、ありがとうございました。



石上由紀さん クレイトン・ジョンソン先生邸にお招き時に

## 豚事協海外研修2023年、アメリカツアーについてのご報告（前半）

豚事協事務局 加藤 大輝

24期の海外研修として、2023年6月6日～12日の日程、参加者11名と通訳兼コーディネーターとして(株)スワイン・エクステンション&コンサルティングの大竹聡代表取締役獣医師の合計12名で実施されました。(表1)今回の海外研修先はアメリカです。

6日羽田空港で集合し、アメリカ・アトランタ空港で入国しさらに飛行機を乗り継ぎ、目的地であるアメリカ中西部アイオワ州都デモイン空港に到着したのは現地時間の6日の深夜12時すぎでした。さっそく丸一日かけた長時間の移動には初めての海外や久々に出国という参加者も多く時差ぼけや疲れがでておりました。アメリカ中西部、遠いです。そして見渡す限りのトウモロコシ畑。本当に何もありません…。でも参加者はみなアメリカに到着したことに興奮がやまず笑顔がはじけておりました。

7日は一日かけてワールドポークエキスポ視察です。ホテルでのアメリカンサイズの朝食で高揚しつつ、会場に入り我々を迎え入れたのは巨大なマクドナルドのトレーラーキッチン。無料でマフィンを配布しており（ハンバーガーはビーフだからでしょうか）、いきなりスケールの大きさと気前の良さに衝撃を受けます。2023年6月現在アメリカはとてつもな

い物価高騰をむかえており、水1本3ドル、マクドナルドでも10ドル以上する状況で無料配布。それも一人ひとつなんて制限はありません。どんどんもって行って積極的に配布しております。(図1)

展示は現在カリフォルニア州法12で大変な騒ぎになっているアニマルウェルフェア（以下AW）関連が多く、フリーストール管理のためのシステムや機材、AWに配慮された商品など多く紹介されておりました。図2、3のように日本ではみたことのない変わった形状のストール状のような商品など驚きの連続でした。お昼すぎには会場は人であふれまさに



図1 巨大マクドナルドトレーラーキッチン

表1 海外研修参加者

所属	名前
(有)松村牧場	松村 昌雄
(有)ブライトピック千葉	伊藤 広大
(有)石上ファーム	石上 由紀
(株)アーク	佐々木 翔
(有)みずの	佐藤 政広
(有)アクティブピッグ	山本 雄大
(株)林牧場	林 丈志
(有)農山畜産	農山 文康
熊本興畜(株)	堀井 保彰
(有)永峰養豚場	長峰 智浩
日本養豚事業協同組合	加藤 大輝
(株)スワイン・エクステンション&コンサルティング	大竹 聡



図2、3 変わった形状のストール



「お祭り」状態でした。当然のようにふるまわれるビールなどアルコールをいただきながら商談する姿（我々もそうですが）には文化の違いを体感しました。ふるまわれるのはパッカー各社が提供するソーセージや生産者団体が自ら焼くスペアリブ（図4）とこれもまた豪快。そしておいしい！

8日はポークエキスポの会場視察も続ける中でアメリカの養豚企業スミスフィールドとJBSと主に現状の生産や屠場の状況をヒアリングするためにミーティングを行いました。（図5）コロナ禍による労働者離れ、物価高騰によるコストアップ、穀物価格高騰による飼料価格上昇もあり、現状は養豚の生産においては赤字が続く厳しいと述べられました。そんな中でもアメリカ最大手パッカー（1社で日本全体母豚79万頭（R4）より多い母豚93万頭を保有しています）、スミスフィールド社はAW対応にむけて全農場でフリーストール化しているなど着々と次の時代に向けた設備投資をしています。やるからにはどう



図4 生産者団体が自ら焼くスペアリブ



図5 アメリカ最大手パッカー スミスフィールド社とのミーティング

やったらAWに対応して利益がでる仕組みにするか、誰が一番早くできるかという競争があり、変化に素早く対応するアメリカビジネスの強さを目の当たりにしました。

豚肉販売の現場を見るためにウォールマートへ（図6）ハムソーセージなどの加工品が圧倒的の多く、安い！スペアリブ1本は10ドルには驚きました。（76円/100g）一方でスライスされた豚肉はなんと1.26ドル/100gつまり176円/100g（140円/ドル）これでは日本輸入されたら日本の豚肉より高くなってしまふほど…。日本では当たり前のカットやスライスはコストアップというがはっきり見えました。

<後半は次号11月号にお送りします>



図6 スペアリブ1本10ドルの衝撃

表2 海外研修日程（今回は前半、黄色の部分）

日程	内容
6月6日	羽田出発、デモイン到着
6月7日	デモインにてワールドポークエキスポ視察
6月8日	デモインにてワールドポークエキスポ視察 スミスフィールドとミーティング JBSとミーティング
6月9日	クインシーにて繁殖農場見学
6月10日	クインシーにて肥育農場見学
6月11日	デモイン出発 翌12日羽田着

## 豚事協共同購入資材のご案内

### ・ヘラクレスの鉄腕 200A-S

重い豚の死亡を狭い場所から危険なく1人で取り出すことが可能です。

ヘラクレスの鉄腕の操作性や伸縮可動、180度回転することが可能なことにより狭いコーナーも簡単に曲がり障害物を回避することができます。

仕様

幅…53.3cm

長さ（フットボードを除く）…106cm

高さ（最小）…180cm

高さ（最大）…249cm

重量…331kg

速度制御…ツイストグリップスロットルによる無段階速度制御

駆動用モーター…24V、550W

モーターブレーキ…内蔵（24V）

バッテリー…充電式ゲルバッテリー（12V）2個

充電器…内蔵（24V）

ウインチ（24V）…4,500lb（2,000kg）

ウインチケーブル…合成ケーブルまたは亜鉛メッキスチール

本体価格 お問い合わせください。輸入ごとに価格変動します。

発送元 RO-MAIN社（輸入元 株式会社NKT）



## 豚事協の第24期行事

### 理事会

第 1 1 5 回	……………	令和 5 年 6 月 15 日 (木) (東京)
第 1 1 6 回	……………	令和 5 年 7 月 28 日 (金) (東京)
第 1 1 7 回	……………	令和 5 年 7 月 28 日 (金) (東京)
第 1 1 8 回	……………	令和 5 年 9 月 21 日 (木) (東京)
第 1 1 9 回	……………	令和 5 年 12 月 21 日 (木) (東京)
第 1 2 0 回	……………	令和 6 年 3 月 14 日 (木) (東京)

### 豚事協セミナー

北海道支部セミナー	……………	令和5年9月15日(金)
東北支部セミナー	……………	令和5年10月6日(金)
関東支部セミナー	……………	令和5年11月2日(木)
中部支部セミナー	……………	令和5年12月1日(金)
九州支部セミナー	……………	令和6年2月9日(金)
沖縄支部セミナー	……………	令和6年3月1日(金)
関西中四国支部セミナー	……………	令和6年3月22日(金)

### 女性部

第16回女性部セミナー	……………	令和 5 年 日程未定
-------------	-------	-------------

### その他

海外視察研修	……………	令和5年6月6日～12日(アメリカ)
--------	-------	--------------------

※青字は令和5年9月1日以降の行事となります。都合によっては変更・中止となる可能性がありますこと、ご了承下さい。

### 編集後記

\*\*\*

「暑さ寒さも彼岸まで」と昔からよく言いますが、本当に今年も暑い夏です。秋の彼岸までに常識的な気温に落ち着いてくれることを祈るばかりです。暑いばかりだと辛いので、秋に目を向けたいと思います。秋と言えば「〇〇の秋」といいますよね。「実り」や「収穫」それにちなんで「食欲」の秋なんてよく聞きますが、今回はこれも聞きなじみのある「芸術の秋」についてです。なぜ秋に芸術かというと、昔から権威のある展覧会が秋に催されることが多かったことから言われております。実際に日展(今年は11/3～@国立新美術館)や院展(今年は9/1～@東京都美術館)、二科展(今年は9/6～@国立新美術館)など目白押しです。私は美術品や絵画がとって好きというほどではないのですが、美術館巡りを趣味とする弟につれていかれ少々行っております。そんな私でも涙するほど感動した作品があり、今年の秋にそれを見学に関西まで行くことと計画しております。まさに行業の秋、芸術の秋です。奈良県、唐招提寺の国宝・鑑真和上坐像を安置している御影堂のために日本人画家で非常に有名な東山魁夷先生の描かれた作品群がありますが、その「山雲」「濤声」です。以前唐招提寺の改装のため、その内部に飾られていた作品を展覧する企画があり、私は何の予備知識もなく国立新美術館でそれらを見てとても表現できない感動を感じ、美術鑑賞で人生初の涙しました。美術の力というものをその時以来非常に感じます。時間や空間を超えるといいますが、とにかくうまく表現できませんがそんな感動に出会えたら、皆様にも「芸術の秋」をおすすめしたい今日この頃です。(加)